

中屋健一先生とアメリカ科

第10期 岩野 一郎 (1962年卒業)

はじめのひとこと

1958年文二に入学した私は、小学生のころからCIE図書館（GHQ連合軍総司令部の下に置かれたCivil Information and Educational Section民間情報教育局、略称CIEが設立した情報センター。通常CIE図書館と呼ばれた。新潟には1948年5月開館）に通ったりしてアメリカに興味を持っていた。二年次の後半からの専攻を選ぶにあたって、あの短い歴史しかないアメリカが独立してわずか200年もしないうちに世界の大国になったのは何故かをもっと深く知りたかったので、アメリカ科を進学先に選んだ。そして、中屋先生にお目にかかるようになったのは、1959年の秋のことであった。

今年はアメリカ史を持たん！

アメリカ科のカリキュラムでまず絞られるのが中屋先生の担当する「アメリカ史」で、たつぷりとアサインメントが出され、大抵一度は泣かされるとの噂を聞いてはいた。ところが、8時半に始まる授業初日に、「今年はアメリカ史を持たん。フロリダから帰ってきたばかりの一期生の井出が教える。今年私は『アメリカ史の諸問題』を教えることとする」といわれた。ほっとしたのも束の間、井出義光先生の講義のペースはものすごく速く、中屋先生以上にアサインメントも多く、一学期の授業で大学ノート3冊も使ったのは、後にも先にもこの「アメリカ史」だけであった。



(中屋健一先生と井出義光先生)

ところで、「アメリカ史の諸問題」でいろいろなことを教わったが、私にとって重要だったのは、アメリカにおける「ヒストリオグラフィー」（史学史）の部分であった。歴史を記述するに当たっては、どのようにすればよいのか？ランケに代表されるドイツの史学は、アメリカでは「サイエンティフィック・スクール」と呼ばれており、歴史とは「それがあったように記述する」ことが重要であるとされていた。アメリカではそうではない。ジェイムズ・ハーヴェイ・ロビンソン、チャールズ・A・ビアード、それにカール・A・ベッカーなどのいわゆる「ニュー・ヒストリィ」の歴史学者たちは、役に立つ社会科学としての歴史記述を行う。こうした話

を情熱を込めて話された。この講義を拝聴した私は、結局卒業論文のテーマにチャールズ・A・ビアードの史観を扱うことになった。歴史は役に立つべきものであるということが如何に大切であるかを、この授業で学んだのであった。

昼はスキー、夜はウィスキー！

中屋先生は日本山岳会の会員であったと記憶しているが、同時に冬はスキーを楽しんでおられた。学部時代の楽しみは、「中屋スキー教室」に参加することであった。通例、年末は池の平、春は志賀高原で、志賀高原の場合には文藝春秋のヒュッテを借り切って自炊の楽しさを味わった。三泊四日のメニューを分担して作るのであるが、私に中屋先生が付けた綽名が「自炊界の大立者」だったので、私のグループに入った人たちは皆大喜びであった。私はいわばそのグループのシェフ長だったのである。

中屋先生は天狗の湯の風呂に入りに行かれ、旅館の女将を相手に「昼はスキー、夜はウィスキー。本当に楽しいね」とニコニコしておられたのをよく覚えている。正に良く学び、良く遊べの実践であった。

襟にカラーをしている坊主

1962年にアメリカ科を無事卒業し、4月には法学部の大学院に進学して齋藤眞先生のお世話になった。修士課程を終えて1964年にフルブライト留学生としてシカゴ大学の大学院に留学した。1967年にMAを修得し、ウィスコンシン大学で博士課程に進学しようとしていたところ、中屋先生から「駒場でアメリカ研究資料センター助手の口が空いたから帰国したらどうか」との連絡があり、その指示に従って1967年夏に帰国した。しかし事務助手は教壇に立てないということが分かった。

中屋先生は「名古屋の南山大学いうところでアメリカ研究のカリキュラムを充実したいと若くて元気のいいのを一人世話してくれないかといっているぞ」といわれた。私は「南山？何となく仏教系の大学の響きがしますね」と答えた。先生は「坊主は坊主でも襟にカラーをしている坊主だよ」といわれた。そこで、1968年の4月に南山大学外国語学部英米科の講師として赴任することになった。驚いたことに、私が新潟で幼少時に通っていた新潟カトリック教会と南山大学は、同じカトリックの教団である神言会の設立であることが分かった。縁とは不思議なものである。南山では2012年まで43年にわたって勤務した。名誉教授というおまけも付いた。

南山では中屋先生と一年間ではあったが「同僚」になれた。東京大学を退官され、成蹊大学の付属中学・高校の校長になられるまでの一年間、新幹線で朝の9時の授

業に間に合うように「通勤」された。その後も一兩年非常勤としてお出でになったと記憶している。

むすびのひとこと

中屋先生が学科長だった時のアメリカ科で学んだことは、その後の私の進路を決定づけることとなった。中屋先生は研究者・教育者の両面に秀でられておられたが、私は少なくとも教育の面では先生を模範として実践することが出来たのではないかと思っている。1982年以來、南山卒のゼミ生10名余を中心に32年間、私が神戸に転居するまで、月一回の「アメリカ研究会」を続けられたのも、「教育」ではなかったかと考えている。

最後に中屋先生の後を継いで「アメリカ史」を担当された井出義光先生について、一言触れておきたい。井出先生は前にも書いたようにアメリカ科の一期生で、フロリダ大学で博士号を取得された。専攻は南部史と記憶している。そして、われわれ十期生が帰国後の最初の「アメリカ史」受講生となったのであった。先生は日本女子大学でも教えておられ、そこで奥様になられる方と出会われた。先生は御茶ノ水の名倉病院に下宿しておられ、結婚後は川崎市の百合ヶ丘にある集合住宅に新居を構えられることになった。そこで、引っ越しに際してはわれわれ十期生の仲間数人がトラックの上乗りをしてお手伝いすることとなった。小型トラックの荷台に乗るには定員オーバーであったので、途中でパトカーに遭ったらどうしようかとひやひやししながら身をかがめて荷台に乗っていた。無事百合ヶ丘に到着した時にはほっとしたのを覚えている。先生の奥様は言語学の泰斗となられ、今は都内にお住まいとか。井出義光先生には「アメリカ史」ばかりでなく、「アメリカ思想史」をも教えて頂いた。後にフロリダ大学のあるゲインズビルを訪れる機会があったが、このエピソードを思い出しながら、井出先生の学ばれたキャンパスで感慨に耽った。